

平成27年度 第2回総合教育会議議事録			
日時	平成27年8月8日	場所	真庭市役所 3階 応接室
出席者	市長：太田 昇 教育委員：委員長 小谷 真人 委員長職務代理者 中井 靖典 委員 池 亀 進、井 口 利 美 教育長 沼 信 之		
調整事項	(1) 北房における新しい子育て教育環境づくり基本構想について		
経過及び結果	<p>1. 開会</p> <p>2. 市長あいさつ</p> <p>本日は、真庭市の教育分野の政策アドバイザーである、山本先生と荒瀬先生に来ていただいている。</p> <p>第1回総合教育会議の中で現代の教育はどうあるべきかについて私なりの考えを申し上げ、また考えをいただいて、市民の方にわかりやすい、真庭市教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を作っていこうという議論をした。現代の教育とは共に育む共育である。学校教育、家庭教育もあるが、近代教育の中心は学校教育であると考えている。学校という集団の中で自他を認め合い、集団の中で自立した社会の担い手、未来の大人を育てていく場であると申し上げた。また、学校では、構成員である教員も成長する場であってほしいということも申し上げた。</p> <p>本日は、具体的な話として北房地域における学校統合の関係を調整事項としてとりあげたい。</p> <p>3. 教育委員長あいさつ</p> <p>北房地区の新しい子育て教育環境づくりについて、市長部局と教育委員会が連携した取り組みが始まったことは、総合教育会議の成果ではないかと思っている。</p> <p>真庭市が合併して10年が経過したが少子高齢化の中、多くの課題をかかえている。政策アドバイザーの先生方には、真庭市の教育、学術、および文化の振興に関して、ご指導やご助言をお願いしたい。</p>		

4. 政策アドバイザーから

（荒瀬先生：要旨）

国全体としても小・中・高12年間を通してどのような力をつけていくのかというのが現行の学習指導要領、次期学習指導要領でも基本になっている。高等学校にどのように繋げるかが重要なことである。3年前に中央教育審議会（以下、中教審）が教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について、学び続ける教員像というタイトルの答申を出した。これまでは教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できるということが教員に求められていたが、現在はこのことに加えて、新たな学びを展開できる実践的指導力（基礎的、基本的知識の習得に加え思考力、判断力、表現力等育成するため、知識を活用する課題探究型の学習、協同的学びなどをデザインできる指導力のこと）が求められている。次期学習指導要領は大きく変更し、特に高等学校の学習指導要領は相当大きく変更される。高等学校に向けた小学校、中学校の学習指導要領も大きく変更するが、その方向性は、3年前、どのような教員になって欲しいかという中高教師の答申の中にすべて書かれている。ここに書かれていることは、学校教育法30条2項に示された、学力の要素3つが踏まえられていて、これからの社会を生きて行く上で必要な力をどのようにして育てていくのかということデザインできるような力をもった教員が必要だということが示されている。デザインとはどういったものなのかということだが、デザインとアートの違いはデザインにはクライアントがいるということ。「学びをデザインできる指導力」におけるデザインのクライアントは子ども達である。

選挙権年齢の引き下げによって、高校3年生の中にも投票権を持つ生徒が存在するようになるが、高校生だけでなく、小学生や中学生にも社会が身近に感じられるようになったと受け止めるべきではないかと思っている。これに対して子どもたちの力をつけるために各学校がどのような行動をするべきなのかについて、今後中教審で議論していくが、高等学校の次期学習指導要領で「公共(仮称)」という新たな科目を入れる予定である。「公共」という科目を担当する人が社会や政治のことを教えるので良いのか。私は一つの科目だけで学ぶのではなく、全体を通じて学ぶことが必要になってくると思っている。私たちは、若い人たちに自分を大切にというのが、それは政治と無関係ではない。自分の生活は政治によって決まっている部分もある。ならばそういう力をつけるには学校全体で考えていかなければならな

いと考えている。

かつて、中教審で、すべての高校生が身につけるべき力とは何かという議論を行った。それは学び続ける意欲と市民性という結論に達している。

基礎学力を測るため、高校生の基礎学力テストが検討されていて、2020年から開始する予定である。しかし、そのテストで高校卒業時の能力の全てを測ることは不可能である。テストで測れない部分は行動の評価、活動の評価、パフォーマンス評価といった新たな評価方法も現在検討されている。このことは現在研究が進められており、研究成果の導入も今後取り入れていかなければならないことであるとされている。

学校教育法には、高等学校の教育は中学校までの義務教育を踏まえたうえで成立していると示されている。すなわち、義務教育の姿勢は高等学校の教育にも受け継がれていくということ。教育基本法には「各個人の有する能力を伸ばしつつ・・・」と書かれている。これは各個人には能力があることを前提に書かれており、その能力を具体的にするために学校教育法において準用されている。学校教育法30条2項は教育政策の根本になるものだと言える。生きていく上で、生涯学び続けることが必要となってくる。そのために学校で身に付けるべき力こそが、学力の3要素である。生まれながらにして人は学習意欲を有している。その学習意欲を引き出したいが、学習意欲は学年や学校が一段階上がる度に低下してしまう。それは、本当は低下していないが、その他のことが積み重なり、学習意欲が沈んでしまうために低下するように見える。この学習意欲をもう一度引き出せる場を作る際に、学力の3要素をどのように生徒に付けさせるかを考えていくのが学校教育を進めて行く上で大変重要なことであると思われる。したがって、学校とは、各個人に必ず内在する能力を引き出して、社会で生きていくための学力をつける場所であるということが教育基本法と学校教育法から読み取れる。これを実践するのが学校の責任。ところが違反があったとしても誰も何も言わないため、学校は実践していないことがあり、日本中の学校が課題としていることでもある。学力をつけるということは、本来人間が持っている、生きていく力をひき出すこと。それをしていく上で、次期学習指導要領では、総則が大きく変更する可能性があり、ポイントは、カリキュラムマネジメントである。それは教育課程のことであり、教育課程とは、学校の指導のもとに実際に児童生徒が持つ、教育的な諸経験または諸活動の全体

であると言われていた。それは、放課後、遠足といった学校として児童生徒がそこで経験していくことが教育と呼べるものであるならばその全てがカリキュラムであるということである。だから、どのような力をつけるためにどのような力が必要なのか、そのための組織のあり方も含めた条件整備を考えなければならない。教育目標の実現に向けて、PDCA サイクルを行うのがカリキュラムマネジメントであり、カリキュラムマネジメントに関わらなければならないのは、教員全員である。今やっていることが何のためにやっていることなのかを共有して取り組みを進めて行くことは、カリキュラムマネジメントと言える。学校のクライアントが生徒であるならば、生徒のためにどんなことをしなければならないかを考え続けなければならない。

(山本先生：要旨)

ヒトという動物が人間になる。

伝えたいことは3つ。

①ヒトは群れの中で人間になる。残念ながらヒトはいま群れの中で育っていない。家族も小さいし地域も孤立している。ヒトは群れの中で育っていないので人間になっていない。それは、家族、地域、子どもの責任でないことを明確にしておく。ヒトが群れとなることをどう作るか、これは、保育所や幼稚園や学校になろうかと思う。

②子育て、教育は子ども、青年の人生を応援することであると定義づけている。単に狭い学力をつけるなど、人間は産業の道具ではない。一人の人間として幸せに生きることが重要。

③語り合いの「共同学習」が親を支え、教師を救い、子どもを育てる。地域を創る。

いろいろな子どもたち、親も困難を抱えている。つらいことを人に語るのが重要。語るができないのが親の虐待や教師のうつ、子どものいじめにつながっている。自分の感情を他者に伝えられる環境をつくるのが大事。

この3つを貫いていただきたい。

新たな教育委員会制度により総合教育会議ができたが、政治と教育の関係は長年、考え抜かれてできた環境であるので、教育委員会の独立性を尊重し、また教育委員の方は地元の子どもたちをしっかりと見つけて市長にもものを言うという姿勢で頑張りたい。

現在 東京に暮らしているが不安に思うことがある。

一つは、保育所がビルの一室であること。それから地下鉄に乗ると

私立小学校の生徒がたくさん乗って勉強しているのが普通。現在、人口は東京に集中しており、こうした中で育った子どもが日本の青年の大多数になるかと思うと日本の未来が不安になる。ビルの中や有名小学校に通わせるための塾など、小さい時からつめこまれ、しつらえられた環境とレールの上で育っているのが東京の子どもの現状であり、彼らが有名大学に行くのが日常化している。

和歌山大学では“生涯あなたの人生を応援します”というスローガンで6年間やっていた。生涯応援するというと卒業後の応援を考えるが、私は大学に入るまでのさまざまなマイナスを背負っている学生たちを人間として育て直して社会に出すかが切実な問題だった。教育というのは、君たちの人生を応援するというプロセスを教育であると学生に伝えると、学生たちは、子どものころから親や学校に自分の人生を応援しているというメッセージとして感じたことはないという回答が大多数である。親や教師は子どものためにということで一生懸命やっているが、受ける側の子どもたちはそう考えていないというギャップがある。これを大学でやり直そうという事で、教育をしてきた。

保育所、幼稚園、学校は大人がつながる場所としても大事。かつ、素人の親から熟練した親に育っていくプロセスとして重要。保育所、幼稚園、学校では子どもの様々なエピソードがある。家庭のエピソードも持っている。これを語り合うことによって、お互いの苦労をたえあい、学ぶことを学び、子どもの個性を理解して、発達段階の子どもの特性に応じた親の在り方を果たせるようにする。子ども一人ひとり違うように親の対応もそれぞれ違うのが当たり前だが、それを学ぶチャンスはあまりない。親の学びあいを、ぜひ、学校側でやってもらいたい。真庭市のすべての保育園、幼稚園、学校で実施してもらえれば、親も教師も救われると確信している。

真庭だからできる、真庭の環境だから育つ、個性豊かな子どもをおくりだしてほしい。

親を励ます教育行政。〇〇町の2009年のアンケートの結果、就学前の親は子どもに「人とかかわる力を身につけさせたい」というのが圧倒的。小学生の親は、人とかかわる力が6割で基本的生活習慣が4分の1で、学力は10分の1という結果が出た。親としては学力より、どう人間として育つかに関心がある。いじめもあるし、親自身が人間関係におびえのある世代が親になっているので、そのことをストレートに反映している。▲▲府では、学力テストの各学校の数値を公表しようと圧力をかけているが、唯一、〇〇町だけ公表していない。

〇〇町内でも学力テストの結果の優劣はあるが、もっとも学力テストの結果が悪い学校の先生のほうがよく頑張っている。なぜなら困難な家族をたくさん抱えて、奮戦しても奮戦しても奮戦しきれないということをまちの人は経験的に知っている。でもデータだけが理解されると、そういったことが抹殺されて成績だけが追及されるということで公表していない。

最後に、学力テストは子どもを学力の道具のように扱っているようにしか見えない。都市圏ではやむなく子どもを単純化して認識するしかない状況の中で、ルールに乗せるために親は必死になっている。真庭市には豊かな人間関係や自然が残っている。ぜひ、子ども、教員、住民の意欲を引き出せる行政を推進していただきたい。

5. 調整事項

(1) 北房における新しい子育て教育環境づくり基本構想について
(基本構想について、今までの取り組み（ワークショップ・説明会）について、事前意見について事務局より説明)

(質疑)

市長：ワークショップ、全体説明会を経て、基本構想、至道高校跡地の利用について、大筋、理解を得たと感じているがどうか。

事務局：地域によっては、場所のことにご意見はあったが、全体的には、この方針でご理解をいただけたという感触である。

教育長：全体説明会、各地域の説明会を実施してきたが、大筋、この方向で賛成をいただいたと感じている。

教育委員：こども園の時代から小学校が終わるまで、同じ場所で過ごすようになるということで、ハード面もですが、居場所として安らぎも必要になってくるのでそういう対応が必要になってくるのでないか。

人間関係などで小さい子どもながらに悩んだりしないように精神的な配慮、カウンセラーなどの配置の配慮をお願いしたい。

市長：仮に旧至道跡地の場合、中学校とかなり近い距離にある。一体的に取り組んでいきたい。

	<p>教育委員：学童保育はどうあるべきだとお考えですか。(山本先生への質問)</p> <p>山本先生：私の経験から、学童保育があり親が安心して働けるので学童保育がある地域に引っ越すということもありました。こうしたことから、一つは、共働きの家庭の子どもたちの安全の保障があります。もう一つは、働いていない家庭の子どもがある。彼らも放課後は実に貧困である。家に帰ってもひとりぼっち。子どもは群れで育つとあったが、教師が支配している時間は群れにならない。その時間をいかに地域が確保するか、そのためにも学童保育のような拠点が必要である。</p> <p>また、学校の先生がつかめない情報を学童保育の先生がつかんでいて、行政と学童保育の先生、保育園、学校など専門家が集まって支援をするキーパーソンに学童保育がなることが考えられる。</p> <p>教育委員：北房地区のこの取り組みについて、市長部局と教育委員会部局が調整し進めていっていることについて、どのようなご感想がありますか</p> <p>山本先生：ひとつは、今回、総合教育会議という制度ができて議論される場があることはいいことだと考える。もう一つは、学校がひとつなくなるというのは歴史上大転換である。行政上の決着以上に、地域の住民の方の、新しい地域づくりのきっかけに、更に発展していくというプロセスにつなげていくことが重要だと思う。</p> <p>荒瀬先生：過去に、□□市では市内の中心部の中学校を統合したが失敗している例がある。その後、行政がすすめるのではなく地域のことは地域が決めていかないといけないということで、徹底的に話し込んだ。今まであったものを無くすのは全員が賛成というわけにはいかない。反対の人も、反対だけで終わるのではなく、これからの自分たちの地域をどうしていくのかという議論に向かっていかないといけない。同じ土俵の上に立って議論を深めていくことが大事である。</p> <p>市長：今回の統合で絶対反対という声を聞いていない。人口減少の中で学校統合を超えた、旧町単位で固まっていかなければいけないというものを感している。学校教育だけでなく、同じ学校で学んだ仲間とい</p>
--	--

うのは、地域づくりのもとになるものでもある。学校づくりと地域づくりを連動させていくことが今後、求められるのではないか。

教育委員：教育委員会の説明会でも、大きな反対はないと聞いている。これは北房地域の方が、学校がなくなるというマイナス面よりも、その後のことを前向きに捉えて進んでおられるからだと感じる。

私の地域でも中学校の統合をしたが一番喜んだのは子ども達だった。

ある程度人数がいないとクラブ活動等もできない、多くの人と話もできない。成績の順位も変わらない。北房地域の方はプラスの方を捉えて賛同してくれているのではないか。

市長：今後も多くの意見をお聞きしながら検討していきたい。

教育長：今後、準備委員会を立ち上げていくことにしており、この中のご意見をいただき、議論を深めてまいりたい。

（意見交換）

市長：学力は生きる力に直結していると考えている。学校教育でつけた基本的な知識や思考力により、社会に出て成長していく。

現在行われている学力テストでは、その基礎学力を観点に作られているが、真庭市ではその点数が低いことに危機感を持っている。基礎学力は大変重要だと思うがどう思うか。

山本先生：なぜ子どもの学習意欲が失われているか。

子どもたちには、植物が好きだったり、動物が好きだったり、多様に興味を持つ分野がある。学校に行けば行くほど興味の基準が狭くなる。興味から学ぶ面白さを引き出してやる。そのことが数学や物理などにつながっていく。その根本がない。

小さい頃から画一的な管理の中では、学習意欲が失われていく。

私たちの時代は競争で社会であり、それが動機付けであったが、今の子どもたちには働かない。一人ひとりの興味関心をしっかり引き出すことが大事である。

荒瀬先生：学習意欲は全員が持っている。成績が学習意欲に蓋をしていく。今すぐ出さないといけないという成績にとらわれているので、そ

こから外すということが可能であれば、子どもたちは伸びると思う。いつ伸びるかはわからないがそれは大人の問題で子どもたちは気にしていない。それをどう支えていくか。

学校教育法 30 条が示している本当の意味での学力。偏差値が高いというのではなく、生きていくための学力。学校教育はそちらに向いていかなければならない。

山本先生：真庭市は学校規模が小さいので学力テストの点数は、先生が技術を身に付ければ上げられる。しかし、真庭という条件の中で育つ子どもとしては薄っぺらで単純なものにしかない。先生にとっては苦しいかもしれないが、一人ひとりの興味関心が何なのか、どこを伸ばしていくのかということをしっかりやっていくべきだと思う。真庭市でしっかり議論していただいて、どういう人間を育てるのか、そのためにはこの時期にどういうチャンスを与えればよいのか議論をしていただければと思う。その結果として学力テストは上がってくるものだと思う。

荒瀬先生：ある県で学力テストの成績を上げるため過去問を徹底的にやったケースがあるが、成績が上がらなかった。なぜか。面白くないから。子どもたちにとっては過去問をやっている意味が分からない。

子どもたちは本当にやりたいことをみつけたら、それをするための方法を自分で工夫する。本当に大事なのは、子どもが楽しく、面白く学べると思えることが大事。その結果、成績は上がってくる。

教育委員：勉強は学生だけの間で終わるものでないと感じている。小学校・中学校の期間は義務教育というだけあって、基本的なことを学び心に残すことが大事。それから自分の興味を持ったことに進んでいけるのではないかと考える。とはいえ、読み書きや計算といったことは必要だと思う。

教育委員：勉強はある程度詰め込んでせざるを得ないのではないかと考えている。社会人になり、わからないことがたくさん出てきて、勉強をしてきた。そのときに、学生の頃もう少し勉強しておけばと感じたことがある。

山本先生：先ほどの学校統合の問題もだが、学力テストについても主人公である子どもたちの意見も聞いてもらいたい。もっと率直に子どもたちと議論をするべきではないか。

荒瀬先生：ある程度基本は必要。基礎を教える教え方とか、基礎が大事だということが習う側に伝わるかどうかについての工夫が必要であり、単に学力テストの点数を上げることが基礎を教えることにはならない。何が基礎なのかということ教える側がちゃんと持っていて、一人ひとりに合った有効な方法で教える。そして、最終的に自分で生きていける力を身に付けていくという方法を見つけるのが重要。

毎日、一言でいいので、その子の興味関心を持っていることに声をかけてやるのが大事。そういうことだけで子どもが変わってくる。

山本先生：北房地域の統合により、ひとりの子どものことを、保育士も知っているし小学校の先生も知っているし、その子のことを多面的な面からみて、その子の興味関心を持っていること、特質などがわかるということが居場所にもなるし、パワーの源になる。チームとして子どもを見守る、育てることが大変重要。

荒瀬先生：なぜ、基礎学力がつかないのかということを考えなければならない。

教育先進県といわれる県では、きちんとふりかえりをしている。子どもたち自身が何をやったか、何ができるようになったか、何がわからないかといった振り返りを丁寧にやっている。一人一人の興味関心のことも深めてカウンセリングを丁寧にしている。形でなく中身が大事である。

6. 閉会